

ACT:02

鉄狼の陰謀

「ひでえなあ、こいつはよう」

パトランプが闇を切り裂き、惨殺死体を浮かび上げる。数人の男。着ているものはボロであったことから、ホームレスと推測。被害者五名。生存者一名。その男は左足を折られただけで済んでいた。

白髪頭のレインコートを羽織った偉丈夫。オールドハイト市警、ランス警部。市警きつての汚職警官。もっとも現場では、そのようなことを指摘するものはいない。

「警部。ホームレスの一人がようやく落ち着きました」
「おう。どこにいる」

ホームレスは何歳なのかわからない。みすばらしい格好の彼は、救急車のストレッチャーに乗せられたまま、まだがくがく震えていた。

「犯人を見たのか」

「さ、サツの旦那！ 俺は見た、見たんだよう。き、機械の腕の女が、仲間を殺っていくのをよ！」

ランス警部は部下の黒人刑事と顔を見合わせた後——思わずぐいと胸ぐらを掴んでいた。それを阻止しようとする部下をも振り切り、なおもホームレスに尋ねた。

「どんなやつか、よく聞かなきゃならねえな」

天井で古びたサーキュレーターが回転している。

オールドハイトは暑い。高層ビルからの照り返しで、オーブンに入ったチキンになったような気分になる。栗色の髪を振り乱し、女はあまりの暑さに跳ね起きた。

「あっちい」

これまた古びたキッチンへと移動し、缶ビールを取り出し、一気に飲み干す。乾いた喉を炭酸が通り越す感覚が気持ちいい。

「知ってる？」

薄いシートにくるまったままの何か、声を発した。

「どうした、ハニイ」

「暑い日の朝にアルコールなんて取ったら、脱水で死ぬらしいよ」

「今日は死ななかつた」

空き缶をダストボックスに放り込むと、鉄腕はようやく自分が裸であることに気づいた。鈍く輝く鉄の腕も、日に照らされて熱せられたように感じる。

彼女の名前はアンナ・マイヤー。鉄の腕を持つトラブルシューター『鉄腕』である。

昨日は久々に盛り上がった。クリスは生きるために、十代になったばかりだというのに様々な知識を兼ね備えていた。そして、技術も。

女だてらに様々な浮名を流してきた鉄腕でさえ、その知識と技術に感銘を受けた。パジャマパーティーは——もっとも何も身につけることはしなかったが——最高の結果に終わったのだ。二人は、まるで誰かがそう決めたかのように、相性が良かったのだった。

「あとハニイっていうのやめて」

「なんでだ？ 昨日はあんなに盛り上がったじゃないか」

「クリスマスでいいから。まるで僕がセックスだけでここに置いてもらってるみたいじゃないか」

鉄腕は毒々しい紫色のショーツを履き、ファストファッション店で買い置きしているキャミソールを身につけ、ようやく文明人を装った。

「じゃクリス。ひとつ聞くがな。お前はまだ子供だろ。アタシがやるのは、クズ共を殴って金を貰うタフなビジネスだ。ガキ、それも女のガキが首突っ込めるようなことじゃねえ」

「君、頭悪いだろ」

「ああ？」

さすがの鉄腕も、あからさまに不機嫌な表情を見せた。普段はゴーグルで隠れている眼光は鋭い。クリスはようやくシートから顔を出した。黒髪の切りそろえた前髪。年齢不相応な伶俐な瞳。クールな少女だ。

「世の中全ての事件が、殴って済むなら君は大金持ちさ。……嘘だと思うなら、僕を連れてってよ。ここ漫画一冊も置いてないだろ。退屈なんだよ」

鉄腕は舌打ちした後、コートがけにかけている自分のコートの裏ポケットを探り、葉巻を取り出した。赤いシガー・カッターで吸口を作ると、台所から長いマッチを取り出し、キッチンにもたれかかったまま火を点ける。

高級葉巻。文明人の証。

「わかったよ。じゃ、少しお出かけとしゃれこもうか」
葉巻を左手に取ったまま大きく伸びをした瞬間、何か葉巻を弾き飛ばした。火が点いたまま転がる葉巻。遅れて薄い窓ががらがらと崩れる。

撃たれた。

鉄腕はベッドのそばのコートかけからコートを取り、下着だけの自分の体にかけた。防弾防刃だ。死にはしな

い。

「ヘボ野郎。殺し損ねやがった」

ベッドの上のハニイはすでに下に移動していた。キャビネットの上にあるサングラスへと手を伸ばすと、サングラスが銃弾で弾き飛ばされた。

「わざとじゃないの、これ」

ベッドの下からクリスが顔を覗かせた。

「なんで」

「君の葉巻とサングラスを破壊せずに弾き飛ばしただろ。どこから撃ってるのか知らないけど、凄腕だよ」

「つまり、アタシをいつでも殺れると？」

「そういうこと。……使う？」

クリスの手には携帯電話。ひたたくるように奪う。とにかくこの場から逃げなければ殺される。残念ながら、彼女には心当たりが多すぎた。その時であった。彼女が別の者に電話をかけようとした直後、面倒な人物からの着信。舌打ち。

『よう。ブランチは済んだか』

「鉛玉じゃ腹は膨れねえ」

いけ好かない野郎の声。ランス警部。敵でも味方でも

ない。ビジネス相手。今、別に聞きたくもない声だ。

『なんだあ、何をイラついてやがる』

「ブラランチの前に鉛玉を二発ぶち込まれてんだ。うらやましいか」

『そりゃ豪勢なこった。それより鉄腕よう、お前、昨日やらかしたみてえじゃねえか』

鉄腕はイラつきながら、何の話だと返した。いつ頭をぶち抜かれるかもわからない。そもそも誰が何のために狙っているのかもわからないのだ。ぐだぐだと話を引き延ばす気もない。

『ティフォード・ストリートの路地裏で、機械の腕をくっつけた女がホームレスを何人かぶつ殺しただよ。証言も取った。この街で、お前みたいに機械の腕を持つてるやつは何人いるんだろうな』

面倒ごとで面倒ごとだ。そもそも昨日は、一晩中クリスと楽しんでいたので外にも出ていない。喧嘩や殺しなどもつてのほかだ。

「アタシじゃねえ」

『別にお前だと言ってる気はねえよ。ただまあ、お前を引っ張られるとこつちが迷惑なんだ。ペラペラ何を話さ

れるかわかったもんじゃねえ。お前はムシヨになんか入れねえよ。それくらいなら俺がバラしてやる』

「それもごめんだ」

『そうかよ。じゃ、忠告はしたぜ』

何か言う前に、通話は切れた。くそつたれ。結局、埃っぽい床に寝そべって、気に食わねえおっさんの声を聞いただけだ。

「どうすんのさ」

「このまま餓死するか？ ごめんだね」

「どこに電話かけるの」

「情報屋だ。この街の事なら大抵知ってる」

鉄腕が電話をかけようとしたその時、なんとクリスが電話を奪い取り、ベッドの下で埃を被っていた古いノートパソコンを接続すると、何やらタイプし始めた。

「おい！」

「僕、おなか減っちゃってさ。まどろっこしいのはやめにしようよ」

「電話を勝手に使うなよ！」

「要は襲撃者が知りたいんだろ。直接聞けばいいんだよ」

ビーブ音。ダイヤル音。クリスはそれを確認すると、

携帯電話を鉄腕に返す。

『……誰だ』

男の声。まだ若い。ドイツなまり。鉄腕は自信たっぷりにならずくクリスの顔から、この男が襲撃者であろうことを察した。

「あんたこそ誰だい。朝から騒々しいじゃねえか」

『なぜこの番号が……』

「おおっと。言いつこなしだぜ、そいつは。何のためにアタシを狙う。目的は？ 雇い主は？」

『くそッ、少佐……』

短い呪詛。ぶつりと途切れる通話。凶ったようなタイミングで響くノック。招き入れるのは簡単だ。しかし、招き入れられるのは間違いなく災厄だ。

「クリス。ベッドの下から出るなよ」

古いパソコンが気に入ったらしいが、彼女はイラついていた。

「インターネットも繋いでないの、君の部屋？ どんだけ情報弱者なのさ。……退屈じゃないのは結構だけど、お邪魔なら言うとおりにするよ」

鉄腕は立ち上がる。コートは羽織ったまま。外に出れ

ば変質者の類だろう。窓の外から、銃弾は飛んでこなかった。ゆえに察する。本命。今までののは前菜。メインディッシュがドアの外にいる。

「新聞なら間に合ってる」

「アンナ・マイヤー。別名『鉄腕』。間違いないか」

「FeDEXか？ サインしたら帰ってくれ」

ドアをわずかに開けると、そこには金髪の小柄な女が立っていた。作業着めいたモスグリーンの服。革製のコンバットブーツ。三白眼気味の鋭い眼。左腕は、鋼鉄に覆われている。

「殺害命令が出ている。拒否権はない！」

女が左拳を繰り出すと、木製のドアが砕けた。飛び散る破片を、コートを巻き付けて防ぐ。鉄腕はキッチンに回り、包丁に果物ナイフ、ペティナイフを次々に投げる。女は包丁を避け、果物ナイフを拳ではじき、ペティナイフを掴んで砕いて見せた。

「綺麗なお嬢さんだ。いったいアタシの家に何の用だ？」

「第四帝国。聞き覚えがあるだろう」

第四帝国だって。なんの映画の話だ。最近とんと映画館に足を運んでなくてね。ポップコーンも満足に食べて

いないんだ。よかつたら、今度一緒に付き合ってもらえないかい。そんなセリフが浮かんで、すぐに消えた。言うことは簡単だったろうが、このきれいなお嬢さんにはそんな余裕はないだろう。肩口には、翼を広げた鷲が、カギ十字のマークの入った円形を掴んでいるワッペンが縫い付けられていた。ネオナチ。ゆがんだ思想を信じ続ける者たち。その使者がやってきたのだ。

「何の話だい」

「その腕は、帝国の技術を盗んで制作されたものだ。どういう経緯かは知らないが、この世界に存在しているはいけないものだ」

「そうかい。そりゃ知らなかったな。何せ寝て起きたらくっついてたもんでね」

「なら引きはがすまでだ！」

左腕から小さなモーター駆動音。振り下ろされた拳を、鉄腕は右腕でつかむ。ブルドーザーが突っ込んできているような、すさまじい力だ。

「……撃つな。私がケリをつける。出過ぎた真似は許さ
んぞ、ミッターマイヤー！」

よく見ると、女の耳には小さなイヤホンマイクが入っ

ていた。狙撃手はこの女の部下、つまり同じネオナチ野郎だったわけだ。迷惑な話だ。鉄腕はわずかに力をそらすと、手を放して体ごと女のこぶしを避ける。

「なるほどねえ。大体の目星がついたぜ。悪いことは言わないぜ、お嬢さん。アタシを本気にさせないうちに、帰ることだ」

鉄腕は床に落ちていた葉巻を拾い上げ、口にくわえた。紫煙を肺へ取り込み、ケミカルな落ち着きを取り戻す。余裕のなさ。技術を盗んでという言葉葉。

「減らず口を」

「アタシの腕とあなたの腕の力比べに来たんだろう。命まで落とすことはないだろう」

実戦訓練。それも、新型兵器のテストを兼ねて。何の目的のためなのかは知らないが、同じような腕を持つ鉄腕に、その相手の白羽の矢が立った。迷惑な話だ。

「ならば、後悔させてやる。命を落とすのは貴様だ！」

女はブーツで床を蹴り、拳を振り上げ跳躍！ 同じように鉄腕も腰を落としてひねり、鋼鉄製の右手を広げて掌底を繰り出した。女の拳を受け止めた瞬間、アパートの床が放射状にひび割れ、ぐらりと揺れる！

「実戦テストは済んだかい」

「……何？」

「じゃあ、次は耐久テストといこうじゃないか」

鉄腕は、なんと受け止めた女の拳を握りこんだ。いかに頑丈なガントレットとはいえど、中には女の生身の拳が入っているのだ。ガントレットはゆがみ、中の腕を押しつぶし、砕く。女は悲鳴を上げる。非情なる軍人の顔をかなぎり捨てて、まるで本物の腕のように血を流すガントレットを右手でかばう。

「勝負ありだ、お嬢さん」

「なぜ……なぜだ……貴様の非効率的な鉄の腕より、こちらのほうが圧倒的に……」

「ホームレスで実験してか？ おいおい、場数が違うぜ」

青ざめた顔の女を鉄腕は肩に担ぎ上げると、玄関から外に出て、廊下を下ろしてやった。女は懐から拳銃を取り出したが、鉄腕はすばやくそれを取り上げた。

「殺せ。任務に失敗した兵士に居場所など……」

「仲間が一緒なんだろう。迎えに来てもらえ」

ぶっきらぼうにそう述べてから、鉄腕は彼女の顎を持ち上げた。鉄腕より、若干年下に見える。まだまだ若い。

鉄腕は彼女の唇にキスをした。触れただけのキスだ。

「アタシもあんたも、女ざかりはこれからだぜ——また会おう」

鉄腕の背中を女はずっと見つめていた。部下の——ミッターマイヤーの声ができるまで、彼女は鉄腕の事を考えていた。

霧の街、オールドハイト。その郊外に位置する自然公園。普段は家族連れがピクニックに訪れるようなのどかな場所だが、こと深夜になると静かだ。木の葉が揺れる音。虫の鳴き声——あえぐような息の男。空気を掻いて走る。木を避け、転び、それでも立ち上がる。男は走る。助けを求めて。

「走れ走れ」

男の頭にぴったりと十字架が合わさる。十字架はリング状にかたどられていて、軍用のスナイプスコープの中に入っている。照準が十字架なのだ。L96A1。英国製スナイパーライフル。悪趣味なトリコロールカラーでペイントされたそれは、女が好き放題なカスタマイズを繰り返したものだ。

神のじ加護あれ
「God Bless You!」

びたりと合わせた男の頭に向けて、女はトリガーを絞った。弾は出ない。当たり前だ。このライフルには弾など一発も入っていない。

「ハー！ ハー！ 助かったな！」

森の中の小高い丘に、トリコロールカラーのパラソルが刺さっていた。女はその下に寝そべり、スナイパーライフルを構えていたのだ。ハンチング帽に、古式ゆかしいチェスターフィールドコート。ハンティングのトラディショナル・スタイルといえるだろう。

「あー、笑った」

女はやおら立ち上がると、パラソルの下に逃えた折りたたみ式の小さなローテーブルから、既に冷めて久しい紅茶の入ったカップを取った。もはや、香りも失せ切った何の意味もない色水を、女はうまそうに飲み干した。

「狐め」

女はいつもこの時間にこの服装でここに陣を構え、趣味でチューンナップしたスナイパーライフルを携えて、スコープを覗いているのだ。狐狩り。ロイヤルファミリーを自称する女にとって、弾を使わぬ狐狩りはもつとも

愉快的レクリエーションだ。

「……だいたい、こんな夜中になんで走ってたんだろ」
女は久々の狩りの獲物に沸いたが、男が通り過ぎたことですぐに興味を無くしていた。ハンティングは終わりで。なぜなら弾がでていたら女はあの『狐』を仕留めていたからだ。

女はぞつとするくらい正確な動きでパラソルを美しく畳み、ローテーブルを折りたたみ、背負った。こんなことを、もう何年も続けている。狐を追って、幾度となく夜を過ごしている。女の姿が霧の夜に溶ける。溶ける。やがて溶けた。

安く買い叩いたサイドカーの調子が良い。

ファイアパターンのペイントを施した、ハーレー・ダビッドソンが、オールドハイトの霧を裂いて疾走する。

自然公園近くの駐車場に止め、またがっていた女が颯爽と降りた。コート、ノーネクタイのシャツ、スマートなスラックス。スニーカー。ラフな格好だ。

「今日は仕事なの？」

「ああ。仕事だ」

女は茶色のロングコートの裏ポケットから、銀色のシガレット・ケースを取り出す。中身の葉巻——ヘンリエッタ・Y・チャーチルズを取り出し啞え、イラついた様子で先を噛みちぎる。長いマッチで火を点けると、落ちていたポートワインのようなかぐわしい香り。『鉄腕』、アンナ・マイヤーの仕事は何でも屋だ。トラブルならなんでも引き受けて、カネにする。

「クリス、お前にも話したろ。弁護士を探してくれって依頼」

「聞いた」

ぶっきらぼうにそう答えるのは、ラフな格好のアンナと異なり、サスペンダー付きのショートパンツにドレスシャツというフォーマルな衣装に身を包んだクリスだ。彼女はすっかり鉄腕の相棒気取りで、何かと外へとついできたがるのだった。

「今日、そいつが見つかつた」

「ピクニックでもしてたの」

「知らね。分かんのはそいつから答えは聞けないだろうってことさ」

ブルーシート。ブルーの国家権力者たち。霧に漂う死

の香り。古臭いレインコートに大柄な白髪男。会いたくなかつた男。しかし、鉄腕にとっては強力な協力者だ。

「よう、警部。調子はどうだい」

「死体の前で言うセリフか？」

舌打ち。本来ならばランス警部に、鉄腕を招き入れる正当な理由などない。しかし今回の彼女には理由がある。

「参つたね、警部。アタシは死体の情報を欲しがつたわけじゃないんだぜ」

ブルーシートが『彼』にかけられていた。死んでいる。

弁護士。恋人からの依頼。連絡が取れなくなつた『彼』を探してほしい。恋人のために流した涙。鉄腕は『同じ』女の涙に弱い。

「死んでる」

クリスは臆せずブルーシートをめくり、彼の素顔を見た。恐怖にゆがんだ顔。ひしゃげた腕。つぶれた内臓。まるで押しつぶされたような死体。恋人にこの死に様だけは伝えられないだろう。

「いつからガキを連れ込むようになった」

ランス警部は構わずたばこをコートの裏ポケットから取り出し啞えた。捜査は大体済んだ。あとは犯人を挙げ

ることを考えねばならない。もちろんノーヒントだ。

「女を連れて歩くのはアタシの趣味でね」

「死体は見世物小屋の出し物じゃねえんだ」

「どんな映画よりリアルだぜ」

「ならチケット代を払え」

へらへら笑う鉄腕に、警部はいい加減うんざりしている様子だった。下らぬ話にカローリを使ってもらえない。

「しかし警部。あんたついてるぜ」

「何がだ」

「今日は何日の何曜日だ」

「十三日の木曜日だな」

クリスが不思議そうに立ち上がり、二人を見上げた。

「木曜日に何かあるの」

「別に。ここじゃいつだって目がある。曜日なんざ関係ない」

そこまで言って、警部はようやく合点が言ったようだった。ぼりぼりとこめかみを搔くと、あたりを見回す。

男が死んでいるのは、林の中。と言っても、この自然公園は『不自然に』人の手が入っている。木と木の間は一定に保たれており、上からならば見通しは良いだろう。

北の方角に小高い丘。

「なるほど。しかしよう、あのイカレ野郎に何か期待してどうする？ 話を通じんのか」

「女同士ならやりようがある。どうだい警部、アタシに任せてみちやあ？ もちろん手柄はあんたに立てさせてやるぜ」

警部は無精ひげの混じった顎をさすってから、任せると一言。いかに楽をするか、人をこき使うかは彼の永遠のテーマだ。

「ま、うまくやれや」

「アタシはいつだって上手さ」

小高い丘の上。クリスを連れてピクニックだ。まだ風は寒い。当分春は先だろう。

トリコロールカラーのパラソル。寒空の下の優雅なティータイム。トリコロールカラーのフォールディングチェアに身を預け、湯気はとうの昔に失ったティーカップを口に運ぶ。

「伯爵。久々じゃないか」

「ティータイムだぜ、『鉄腕』。見てわからない？ 僕のティータイムは誰にも邪魔されちゃいけないんだ」

サンジェルマン伯爵。かつてフランスの社交界にいたという、怪人物。不老不死の体現者。イギリスかぶれの年齢不詳の女のことを、誰がそう呼んだのかはわからなかったが、住所不定にして神出鬼没なこの女の事を、勝手にそう呼ぶものも少なくなかった。彼女がそれを受け入れるのも、早かったのだ。

「誰だい、その女の子」

「クリスだ。まあ相棒ってどこか」

頷くクリスに、伯爵はふうん、と興味もなさげな風である。クリスもまた同じらしく、折りたたみ式のサイドテーブルに載せられたクッキーと冷めた紅茶を見つけ、それに手を伸ばした。

「なんだ、欲しいのか？ 紅茶は飲むなよ」

伯爵はにかりと笑みを見せた。鉄腕はなお手を伸ばそうとするクリスの手首をつかんだ。

「食うな」

伯爵には聞こえない小さな声で、真剣な瞳で。クリスは眉をひそめたが、静止を拒んでまでクッキーを食べようとは思わなかったのか、手をひっこめた。

「ところで伯爵。あんた、昨日狐を見なかったかい。あ

そのビニールシートだ」

伯爵は首に下げている十字架をあしらった悪趣味な望遠鏡で、ビニールシートの張られた方向を見る。目から離して、鼻を鳴らす。

「自然の摂理さ、鉄腕。弱きは淘汰され、強きのみが生き残る」

「この公園はあんたの庭だ、伯爵。『狐を狩ったのは誰だ？』」

伯爵は口に紅茶を運び、ハーブクッキーをかじった。楽しそうに。ハンターたちがまだ見ぬ獲物を夢想するよう。

「昨日、狐は二匹いた。僕は一匹仕留めた。もう一匹は逃した。雌狐さ」

「雌か」

「金色の雌だ。さぞかし毛皮にしたら美しいだろうよ」

彼女は漏らすように、不気味な笑いを浮かべた。キマっている。自前のハーブクッキーが、さぞかし愉快な幻覚を見せているのだろう。

「大丈夫なの、この人」

たまらずクリスがひそひそと鉄腕に耳打ちした。